
税関発足 150 周年にあたって



税関は、明治5年11月28日（1872年）に全国の開港地に置かれた「運上所」が、その呼称を改めて正式に発足してから、令和4（2022）年に150周年を迎えました。

明治の初頭は、欧米諸国が海外に進出する中、日本も近代国家に向けて歩み出した変革の時期にありました。税関が発足した明治5（1872）年には、学制の公布、日本で最初の鉄道の開通、太陽暦であるグレゴリオ暦の導入発表など、近代化を象徴する様々な出来事がありました。それから150年を過ぎた今も税関は、これらの諸制度やインフラ同様、日本の経済・社会にとって必要不可欠な存在となっています。

開国当時、箱館（現在の函館）・横浜・長崎の3港で行われていた貿易は、日本の産業発展に伴い、拡大していきました。今では、日本全国で119の港と32の空港が、外国との貿易のために開かれております。今日までの長い年月の中で、貿易は国民生活を豊かにし、日本の経済は大きく発展してきました。

貿易が拡大し、国際物流が高度化・多様化する中、税関は、水際取締りを通じて国民生活の安全・安心の実現を図るとともに、関税や消費税等の適正かつ公平な徴収、税関手続の迅速化等による貿易の円滑化などに取り組み、健全な貿易の発展に貢献してまいりました。

発足から150周年という大きな節目を迎え、今後とも、これまで先人たちが築いてきた良き伝統を守りつつ、社会情勢や環境の変化を的確に捉え、業務の更なる高度化・効率化を図ることにより、税関が50年後、100年後も国民の皆様のご期待に応えられるよう、努めてまいります。

令和5年4月

財 務 大 臣

鈴木 俊一